

# 概要

道総研農業研究本部および中央農業試験場は、長沼町(本場)・滝川市(遺伝資源部)・岩見沢市(水田農業G)合わせて約106ha、職員122名をもって構成され、農業研究本部内の試験研究を総合的に企画調整しています。また、道央圏5振興局を対象として地域のニーズに対応する試験や、農業研究本部内共通の専門分野における試験研究を行っています。

場長(兼)

副場長

作物開発部

- 畑作物と果樹の品種改良と栽培法
- バイテク技術を用いた効率的な選抜技術の開発や有用遺伝子の同定や利用、新たな育種素材の作出
- 農作物の品質向上のための品質評価技術や簡易分析法の開発、機能性成分に関する試験

遺伝資源部 (滝川市)

- 遺伝資源の保存・管理
- 遺伝資源の利活用(提供・特性調査・有用素材の作出)促進
- 主要な農作物の種苗生産と審査補助・指導

生産研究部 (水田農業G:岩見沢市)

- 農業経営および農産物の流通に関する試験研究
- 農業機械に関する試験研究
- 水稻育種・栽培法及び水田転換畑における作物の栽培法、土壌に関する試験研究

農業環境部

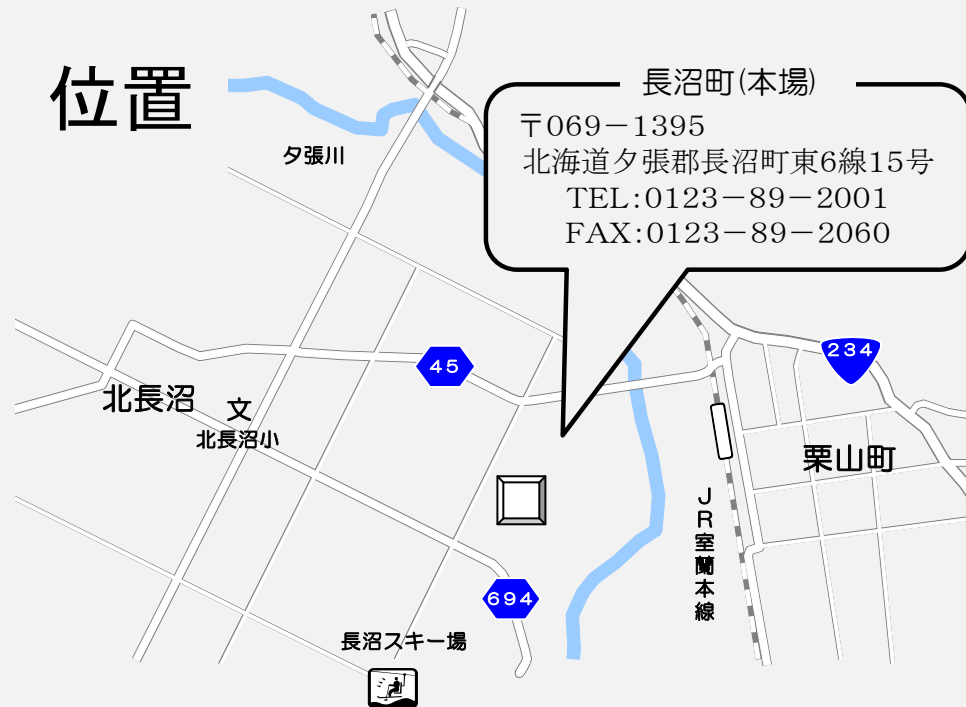
- 農地の生産環境保全、有機農業を支援する技術の研究
- 畑作物及び園芸作物の土壌管理などの研究
- 生産基盤の整備に関する調査、肥料などの分析、依頼分析

病虫部

- 新発生病害虫や難防除病害虫などの発生生態の解明や防除対策の確立
- IPM(総合的病害虫管理)の視点から防除法を開発・改良・確立する試験研究
- 病害虫の診断及び発生予察の高精度化に関する試験研究

北海道病害虫防除所 (道農政部出先機関)

# 位置

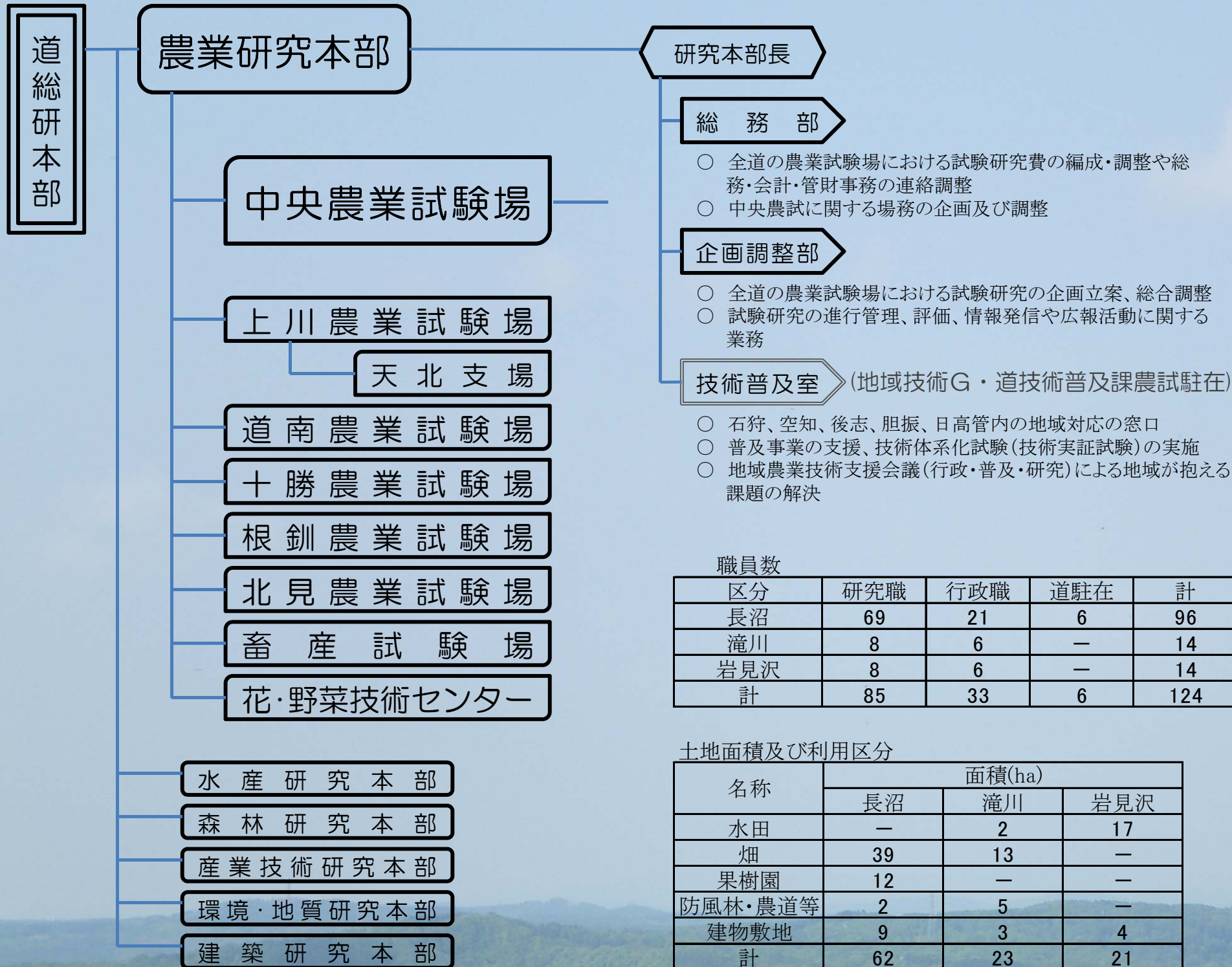


# 参観のしおり



地方独立行政法人  
北海道立総合研究機構  
農業研究本部  
中央農業試験場

# 機構



職員数

区分	研究職	行政職	道駐在	計
長沼	69	21	6	96
滝川	8	6	—	14
岩見沢	8	6	—	14
計	85	33	6	124

土地面積及び利用区分

名称	面積(ha)		
	長沼	滝川	岩見沢
水田	—	2	17
畑	39	13	—
果樹園	12	—	—
防風林・農道等	2	5	—
建物敷地	9	3	4
計	62	23	21

# 沿革

- 1901年(明治34年) 北海道農事試験場設立 国費により札幌市北18条西11丁目において1haでスタートする。
- 1910年(明治43年) 北海道農業試験場として、札幌に本場、旭川・十勝・北見・渡島に支場を持つ全道的な試験研究機関となる。
- 1925年(大正14年) 本場を琴似村(現在の道警交通機動隊庁舎、農試公園付近)に移転する。
- 1950年(昭和25年) 国立農業試験場と道立農業試験場に分離。道立農業試験場は、札幌に本場、渡島・上川・十勝・北見・根室・天北に支場、滝川に原原種農場という体制となる。
- 1964年(昭和39年) 本場・支場を廃し、それぞれ独立した7農業試験場(中央・道南・上川・十勝・北見・根釧・天北)、2畜産試験場、原原種農場を含めた10場体制となる。
- 1966年(昭和41年) 中央農業試験場を札幌市琴似町から長沼町に移転する。
- 1986年(昭和61年) 原原種農場を再編し、植物遺伝資源センターに改称する。
- 1996年(平成8年) 中央農業試験場園芸部の花き・野菜研究部門を拡充し、花・野菜技術センターを設立する。
- 2000年(平成12年) 組織再編整備で、中央農試の研究体制を10部から5部体制に改める。技術普及部を新設する。2畜産試験場を統合する。
- 2006年(平成18年) 新たな研究基本計画を策定する。組織再編整備で植物遺伝資源センターを中央農試に統合する。天北農試を上川農試の支場とする。
- 2010年(平成22年) 22の道立試験研究機関を統合した地方独立行政法人「北海道立総合研究機構」の創設に伴い、農業研究本部及び8場1支場体制となる。